

人間主義の英語教育

— コミュニカティブからテーマワークへ

浅 川 和 也

Humanistic English Teaching

— from Communicative Teaching to Themework

Kazuya Asakawa

I. はじめに

昨年度、中学校の教科書が改訂され、この4月から高校ではオーラルコミュニケーションA, Bがはじまった。JETプログラムやその他外国人講師とのティームティーチングも普及し、聞く、話すことを軸としたコミュニケーションの授業への大転換がはかられるかのようなようである。土屋によればオーラルコミュニケーションでは「場面や目的に応じて、適切に応答したり、発言したりすること」(1990:110)とあり、技能として「できる」ことを要請している。英語教育の目的についてかねてから論じられているように、英語教育は技能訓練ばかりではなく、異文化理解をつうじた平和、協調の実現のための人間形成をめざすものでもある。そこで異文化理解、国際理解としての英語教育の内容が問題となる。

社会心理学では態度は認知、情緒、行動の3領域からなるとされる(バコーウィッツ:1980)。英語の学習でいえば、わかり、好きになり、できるようになることともいえよう。英語が身につくには態度として統合される必要がある。また国際平和、国際協力の実現には諸外国の事情を知識として知るとのことばかりでなく、望ましい態度の形成が必要であるという。ユネスコ国内委員会編の『国際理解教育の手びき』は「国際理解と国際協力のための教育は、単なる知的理解にとどまることなく、望ましい価値的態度の形成を目指すものである」とする(1953:3)。これは40年前のものであるが、知識理解から、より総合的な教育への提言として、その実現につとめたい。コミュニケーション重視の授業形態では生徒が主体的にゲームなどの課題に取り組む展開が積極的にはかられている。生徒が英語を使用し、主体的に活動する授業が試みられていることは望ましい。

その内容と方法についてAsakawa(1993)はグローバル教育の視点から論じた。本稿ではグローバル教育および、現在、北米でひろまっているホールランゲージの視点から、人間教育

としての英語教育を構想する。グローバル教育では知識、態度、技能の育成を目的としている。また、ホールランゲージでは言葉の全面発達において、きわめて人間主義的なアプローチがとられていることに注目したい。

II. 再び、目的論を

再度英語教育の目的について考えてみる。垣田は英語教育の目的と意義について次の5点をあげている(1976:8-9)。

- (1)自国(語)の客観的理解。
- (2)複眼的見方の獲得。
- (3)異質の文化との接触, 対決による教養の高揚。
- (4)変化に適応する能力, 理解力と現実をコントロールする力の獲得。
- (5)国際通用語の習得により, 国際理解が可能とし, 国際社会で活躍しうる人材の育成。

このうち(1)から(3)は異文化理解, 国際理解の一環としてとらえることもできる。また, (4)は平和, 協調にむける人間形成につながるものであろう。コミュニカティブという実用性を強調することは(5)のみに焦点をあてることになる。

また, 国際理解教育という領域について再吟味する必要があるだろう。国連憲章やユネスコ憲章の理念を実現するために1954年からユネスコの国際理解教育協同実験活動計画が実施され, 日本も参加した。その経験をふまえ1956年には『学校における国際理解教育の手引き』があらわされた。

そのなかで「外国語を履修させるということは生徒にとって直接に外国に触れるという貴重な経験となる」(1956:72)とし, その独自性を「外国語科による国際理解というものは, 日本語によるものではなくて, あくまでも外国語をとおして形成されるべき」(1956:72)と外国語の技能獲得とともに形成されるという見解をしめしている。当時の指導要領をふまえて「英語をとおして指導することが主眼であるから, 系統的または組織的に提示する必要はなく, この点でいわゆる風物研究(realia study)と明確に区別すべき」(1956:73)であるとしている。つまり外国語科における国際理解についてはその外国語の習得を一義とするかのようなようである。しかしながら, 最近のグローバル教育では, 人権, 開発, 環境, 平和の問題をあらゆる教科で, あるいは教科をこえて取り組まれるべきこととしている。外国語による相互理解のためのコミュニケーション技能の育成を固有の目標としつつ, グローバルな内容の総合的な展開を構想したい。

Ⅲ. 人間主義英語教育の内容

英語という言語技能の習熟はもとより国際理解や異文化理解をもふくむということでは、英語の教科書が単なるドリルではなく、ひろく社会的内容をも盛り込んでいることからわかる。

英語学習の内容の視点として社会科の領域を参考とする (Asakawa:1991)、グローバル教育の視点から環境、人権、開発、平和の領域とするとの提案もあり、イギリスにおけるワールドスタディーズプロジェクトの成果を英語教育で展開することの構想がある (Asakawa:1992)。グローバル教育では、あるテーマについて活動を展開するテーマワークが1つのレッスンプランとして構成され、整備されつつある。例えば、熱帯雨林を教えるレッスンでは必要な教材、資料などがパッケージとして用意されている。さらに、米国の国語教育でもこうしたテーマにもとづいた教育が、ホールランゲージとして急速に広まっているとの報告がある (桑原:1992)。

英語学習で英語そのものについての理解、表現を学ぶとともに、異文化理解、国際理解をうながす教材をあつかうべきだという前提に異論はないであろう。これまでも教科書の単元にある題材を発展させる、自主教材を投げ入れるなど、すぐれた経験の交流、蓄積がある (菊地ら:1993)。ホールランゲージにおいては、読み物教材も子どもたちが豊かなコンテキストから内容を理解することが容易な本が用いられている。ビッグブックはその一例である。日本ではビッグブックは児童英語教育で使われており、外山 (1992 a, b) はその指導のガイドラインを翻訳している。

さらに、異文化理解や国際理解のみならず、グローバル教育で提唱する次の5つの領域からなる『テーマワーク』 (国際理解資料情報センター:1994) を英語教育においておこないたいと考える。

- (1)相互依存
- (2)イメージとものの見方
- (3)社会的公正
- (4)紛争、対立とその解決
- (5)変化と未来

このことは自分と仲間、そして世界とが互いにつながっていることを知る、さまざまなものの見方、偏見 (ステレオタイプ) 身のまわりや世界での人権侵害の問題に気づきそれを克服する。異なった意見を持つ者との対立。さらに自分が社会を変えているということへの見通しを持つこととなる。その実現のために吉村 (1993) が提示するテーマが参考になる。

吉村は国際理解教育の児童英語教育での実践を独自の視点で実践している。3カ月、あるいは半年にわたる実践にあたり、児童英語教室で指導にあたっている教師と事前にワークショップ

プをもって Topic, Theme とそれにともなう活動を立案する。その提案をうけてグローブインターナショナルで教材化し、教材が会員に送られる。このように教室の実践者が教材製作にかかわるといふ点でもきわめて特異である。

次のリスト, 12 Months At A Glance は過去 2 年間のテーマである。Topic, Theme, Activities が Word Game, Action Game, Writing として展開される。他, Pronunciation Worksheets, Song/Chants がつけられる。

1992-93

Area Studies,	The Seven Continents
Human Rights/Peace Education,	Whose Work (Gender Roles)
The Environment,	Weather Of The World
Communication With Different Cultures,	Let's Make A Book About Japan
The Environment,	Endangered Animals
Area Studies,	Antarctica
Human Rights,	Physically Challenged People
Peace Education,	The United Nations
The Environment,	Is This Garbage ?
Area Studies,	Australia
Human Rights/Peace Education,	Refugees
Communication With Different Cultures,	Body Language

1992-93

Area Studies,	The Seven Continents
The Environment,	Dinosaurs
Human Rights/Peace Education,	Native Americans
The Environment,	The Solar System
Communication With Different Cultures,	The Remains Of The World
The Environment,	Different Vehicles In The World.
Human Rights,	October 15 Is...
Human Rights/Peace Education,	Aborigines
Area Studies,	Cambodia
Peace Education,	Ways To The World Peace
Cross Cultural Communication,	Colors
Area Studies,	Where We Are

内容は方法をもって具現化される。グローバル教育やホールランゲージいずれも学習者中心の教授学習形態をとることに注目したい。次にその方法をみる。

IV. 人間主義英語教育の方法論

相手を理解し協調することでコミュニケーションが成立する。コミュニケーションを聞く、話すという技能面からばかりでなく、人と人が手をつなぐ、きわめて人間的ないとなみとしてとらえたい。

言葉が生きてるのは、声や身体をとおして表現される時であり、その意味では、聞く、話すことを軸にしたオーラルコミュニケーションの授業展開は可能性を持っている。しかし、コミュニケーションはイコール会話ではない。ことばはわかっても気持ちが伝わらないという経験は誰しもある。コミュニケーションはより総合的、全体的な関係の過程である。

総合的コミュニケーションを実現するためには教師が生徒に知識を伝達するという一方通行の授業から、生徒が主人公となるような授業づくりがはからなければならない。その転換は、伝えあうこと、分かりあうことを授業の眼目とすることである。授業の総体がコミュニケーションなのである。ホールランゲージやグローバル教育では従来の教え込みから脱却することを主張する。それは伝統的教育観、実践形態への挑戦でもある。

桑原(1992)によれば、ホールランゲージは1980年頃よりケネス&イエッタ・グッドマンによって提唱された運動がもとである。その理論的基礎をデューイ、ハラディ、ヴィゴツキー、ロジャーズらにしているといい、米国の草の根の運動として、現在急速にひろまっている。

ホールランゲージは言葉の学習を「人間性、思考、文化、社会への参加、行動や生活などの全体に位置づけ」(32)、子どもの生活とむすびつける工夫が教師の手によってなされている。さらに、スキルや教科書中心の教育を批判し、学習者中心の教育を基調とする独自の教材、教育方法、子ども・教師観、評価方法をもあわせもっている。教師の仕事は与えられた教科書を教えることから、より主体的に自ら意志決定をおこなう専門職であると、その役割の転換を説く。教師はファシリテーターであり、学習者の自律が目標となる。子どもによる自己評価を尊重し、子どもとともにカリキュラムをつくる展開にいたっている。テーマにもとづきブレインストーミングをおこない、グループで調べ、まとめ、発表するという形がおもにとられている。

ホールランゲージでは、子どもの興味関心、能力、ニーズによって個々の教師がカリキュラムを組み立てるといふ。そのカリキュラムは教科をこえて、複数の教科にわたり統合して展開されるというグローバル教育におけるテーマワークと同じ実践的枠組みを持っている。

ホールランゲージやグローバル教育でいう方法への挑戦を、現場の教師が生徒を主人公にする授業づくりと重ねあわせて考えてみる。(1)集団づくり、(2)集団での思考、(3)自己理解・

自己表現, (4)身体による理解・表現, の4点が人間主義英語教育の方法論となろう。次にこれら4点についてみることにする。

(1)集団づくり

集団づくりはコミュニケーションの授業の基本である。声がだせる, 自分を表現することの教室づくりはお互いの信頼関係をきり結ぶことから始まる。これまでも授業ノート, 学習リーダーや班学習, 教科通信をめぐる取り組みは学びあうクラスづくりに成果をあげている。コミュニケーション活動によって自分に自信をもつこと, 他人を尊重できるようになるのである。

(2)集団での思考

読みの授業で1人の考えでは気がつかなかったことが, クラスでの意見交換をするうちに, 読みが深まることがある。ある特定の解釈を正解とするのではなく, さまざまな考え方・見方があること, 書かれたとおりに読むのではなく能動的な読みも相互コミュニケーションによって触発されるであろう。

グループである単語から連想されることがらを書き出すことだけでもさまざまな発想のちがいに驚かされる。グループでストーリーを紙芝居, OHP芝居化する, 劇化する実践や漫画などからストーリーを創作する実践では, ゆたかな創造力の発揮をみている。

(3)自己理解・自己表現

初歩的な自己紹介でもある場面での決まりきった言い方をおぼえるのではなく, 自分の気持ちや賛成反対を表明することによって, 自己理解の機会となる。例えば, 男女の役割など, 普段あたりまえだと思っていることを考えるような内容を入れれば, 自分の持つステレオタイプに気づく契機にもなろう。

文型をもちいた自己表現活動はまさしくコミュニケーション活動である。さまざまな生活の場面をとらえて表現活動を仕組むことができる。自己紹介カード, 絵日記などの実践はすぐれた成果をあげてきている。そうした作品を展示する, また文集にするなどして相互交流することでさらにクラスがたかまっていく。書くことばかりでなくスピーチ, ペアカンバセーション, 調べ学習, グループプレゼンテーション, 劇などの自己表現活動の展開もある。

(4)身体による理解・表現

他者と関係をむすぶコミュニケーションの技能は知識ではなく声や身体を介して表現された時, 自分のものになるという。ロールプレイなどでも感情や思考が十分でなければある表現を自分のものにできない。なるべく音声, 身体活動を授業に取り入れたい。先のいくつかの事例はいきいきとした生徒が動く授業となっている。

V. おわりに

外国語学習の場合にはその言語を使用するのが教室に限られる、明確な動機がない、などの点で、また米国のホールランゲージが国語教育であることをふまえると、外国語教育においてそのまま適用できるわけではない。言語材料の一定の基礎の定着をはかるためには言語的な訓練が必要であるという意見もあるだろう。

生徒が調べ、発表するプロジェクト学習を实践した報告（米沢：1993）がある。入学試験ではさ末な知識を問う問題も後をたたないという批判はあるが、そのなかでいわゆる大学入学試験に合格する学力をもつけていくという見通しをもつことで、生徒の参加を保障している。つまり、生徒が納得することが大切であり、生徒の気持ち学習におおきく関与する。グローバル教育やホールランゲージではこのような学習者による関与を大切にする。また、学習者の自律という点では学習者の心理面からアプローチする統合教育（森：1994）といった展開がある。人間の全体性から教育を問い直そうとしているが、英語教育への応用はまだはじまったばかりである。

テーマワークの枠組みと学習者の心理面を尊重する新しいアプローチをどのように結びつけていくか、さらに言語技能およびコミュニケーション能力の獲得に見通しをもつことが肝要となる。

参考文献

- Asakawa, K. Global Issues in English Classroom, *TOKAI REVIEW* 17, 1992
 Activities for cooperative learning and global awareness, *TOKAI REVIEW* 18, 1993
 浅川和也「英語教育におけるグローバル教育」『現代英語教育』1993年9月号 研究社出版
 「国際理解教育と英語教育」『紀要』28号 東海学園女子短期大学 1993
 垣田直巳『英語科教育法の研究』協同出版
 国際理解資料情報センター『テーマワーク』1994
 桑原 隆『ホール・ランゲージ』国土社 1992
 Fisher, S. and Hicks, ed. *World Studies 8-13*, Oliver & Boyd, 1985. 邦訳 国際理解教育資料情報センター編『ワールドスタディーズ』めこん 1990
 大津和子『国際理解教育』国土社 1992
 新英語教育研究会編『生徒の心を豊かにする』三友社出版 1993
 土屋澄男『英語科教育法入門』研究社 1990
 外山節子『英語おはなしたから箱』1992 アジソン・ウェスレー・パブリッシャーズ・ジャパン
 『ピクチャパフィガイドライン』1992 ペンギンブックスジャパン
 バコーウィッツ, L・斉藤ら訳『社会心理学入門』サイエンス社 1980
 Yoshimura, M. 'Global Education in Children's EFL' 第19回 JALT 国際大会発表資料 1993
 森真由美「統合加速学習研究会発足にあたって」『SAIL』1号, 1994
 ユネスコ国内委員会編『国際理解教育の手びき』光風出版 1953